猫一疋の力に憑て大富と成し人の話

南方熊楠

「ホイッチングトン」物語は、吾が紀文大盡傳と等しく、英國で誰も知れる成り金譚也、予此頃一篇を綴り、龍動の、「ノーツ、エンド、キリス」に遺り、此物語の起原を論じたるを柳田國男氏の勸めに從ひ、聊か增補して貴誌に寄す、採錄有らば幸甚也。

此物語の大概は、「ヂック、(リチャードの略)ホイッチングトン」少にして孤なり、富商「サー、ヒユー、フヰツワレン」の厨奴たり、主厨に虐せらるゝに堪えず、脫走せしが、道側に息んで、「ボー」寺(龍動)の鐘聲を聽しに、「ホイッチングトン」主家に還らば、三たび龍動市長たらんと言ふが如し、因て主家に還る、其後程無く、主人の持船出航に莅み、「ホイッチングトン」、唯一の所有物たる猫一疋を船長に委托す、其船「バーバリー」に到りしに、國王宮中に鼠多きを憂る最中なりければ、高價もて猫を買へり、船歸るに及び、「ホイッチングトン」猫の代金を受け、商買の資本に用ひ、大富と成り、主人の娘を娶り、其業を紹ぎ、男爵に叙せられ、三度迄龍動市長と成りしと也、(Webster's International Dictionary of the English Language, Sprinfeld, 1896, p. 1,715.) 一六〇五年出版で現存せざる戲曲 "The History of Richard Whittington" 以降、此話追々俗間に大に持囃さるゝに及べり、(今年出版、大英類典卷廿八、六一五頁、下同じ)

「ホイッチングトン」の史實は頗る物語に異なり、云く斯人素と孤貧ならず、「ウヰリャム、ホイッチングトン」男の子、十四世紀に生れ、一四二三年死せり、營業は雜貨商にて頗る富めり、一代に四回迄龍動市長と成り、屢ば英皇顯理四世と五世に大金を貸しつ、世傳に一四二一年、此人顯理五世夫婦を饗し、宴畢て、曾て彼れに貸す所の六萬磅の證文を燒きて誠忠を表せりと云ふ、子無りしを以て、死に臨んで一切財產を公益慈善の事業に遺せり、生存中の善業又多かりし故、後世其德を稱する事夥しと。

英人故「クラウストン」(W. A. Clouston, Popular Tales and Fictions, 1887, Vol. II. pp. 65—78.) 歐洲諸邦に行はるゝ本話の異傳數多く擧たり、今其露國に傳はれるを引かん、云く、貧孤兒有り、富人に事ふること三年、賃金三厘を受け、兒輩が猫を苦むるを見、三厘を擧て買ひ取る、去て他の商人に傭はるゝに及び、其商人忽ち暴かに富めり、商人利を求めて長航海に出立せんとし、船中の鼠を驅る爲に、孤兒の猫を伴ひ去る、遠國に着し旅宿に舍せしに、主人其太だ富るを見て、鼠と鼠群棲せる寢室に臥さしめ、夜中食ひ殺されん事を冀ふ、扨翌朝往き見るに、商人安穩にて鼠悉く横屍し、猫商人の腕上に喉鳴らし居れり宿主大に驚奇し、一囊の黃金もて猫を買取る商人事濟んで航し還る、船中以爲く、斯る大金を彼の孤兒に渡すは惡也と、因て之を私有せんと決心するに、忽ち暴風起り、船將に覆んとしければ、大に悔を天に祈り謝罪し、風輒ち止み、歸國を得たり、因て正直に大金の猫代を孤兒に授け、孤兒大に悅んで、先づ多量の香を購ひ、燒て、上帝に酬恩せりと。

「アブヅラ」の波斯史に云く、「シラフ」市の人「カイス」、父の遺產を蕩盡し、二弟と俱に市の對岸の小島に移る、後ち此島を「カイス」と呼ぶ、其頃の風として、商船貿易に出る前に船主貧民より多少の贈品を受け、成るべく上手に之れを他國で賣り、事業成功して歸國の後ち、贈品の價に利足を附し、別に禮物を副て貧民に與へたり、是れ不在中、貧民朝夕商船の爲に祈禱しつればこそ、此の贏利有りしと信ずるに由る、扨一商船有り、「シラフ」より印度に赴むくに莅み、船長市中に殘され貧しく暮らせる「カイス」の老母に贈り物を求めけるに、伴共使ひ果し

て、是れのみ存せりとて、一猫を與へつ、其の船印度の或る港に着し、船長其の地の王を訪ひ、厚く贈遺せしかば、王悅んで之を饗す。爰に珍事なりしは、卓上の皿毎に、棒持てる僕一人つゝ之を守る、是れ室中鼠多く、少く油斷すれば忽ち食物を盜まるゝ故也、船長之を見て思ふ所有り、翌日彼の老母の猫を籠にし、持行て放ちしに、殺獲無數也、因て之を王に獻じ其故を告ぐ、王大に悅び、船長に賜物多く、別に土産珍寶と、女奴、貨錢、及び珠璣を積ましめ、彼老女に與へよと委任す、此船長至極親切にて、歸港して直ちに、王が遺れる諸物を老女に與へ、老女欣嬉して三子を招ぐ、然るに三子既に島地に多人を聚め、開拓し居たれば、反つて母を其島に招き徙らしめ、此度手に入來れる財寶もて、船舶多く買ひ、廣く海外に貿易し、又外國船十二を奪ひ取り、遂に海賊軍を編成す、爾後年々盛興して王國を建てしが、凡そ二百年續きし後ち、波斯帝に滅ぼさる、一二三〇年の事也と。

「クラウストン」結論して曰く、上述の露國傳話を「ラルストン」評しけるは、燒香等の事は、此譚の佛敎に基けるを示すと也、是れ眞に近からん、但し「ラルストン」は、波斯に既に、史實として此話書ける物有しを知ざりし如し、想ふに其根本たりし佛說は、支那を經て露國に達せしにや、但し一方、波斯に傳はる事久くて、史實らしく持囃されし程なるに今迄斯種の物語り印度より見出されず、亞細亞の史書に小說を雜る事多く、隨て「カイス」の母、猫に資て卒かに富めりて久しからぬに、男子容貌端正なるを生む、既に子有る上は自然費用多かるべしとて、海中に往て珍寶を求めんとし、妻も承諾す、富人念ふに、若し多く財を留めて婦人に與へなば、必ず驕り出で、碌な事有るまじとて、少許を妻に與へ、同村に相識れる一商主に皆悉餘財を預け、告て云く、予が不在中妻子究乏せば濟ひ給へと、扨財貨を持ち、大海を航せしに、破船して死し了りぬ、金預りし人は、一向死人の妻子に構はず、彼の富人の妻、親族の力を假り、自營して子を育てけるが、漸く長じて、母に吾が先祖は何して暮したるぞと問ふ、母如々海を航して交易せりと答へなば、此兒亦海中に往き、遭難すべしと憂ひて、汝の先祖は、此地にて商賣したりと答ふ、子母に白して、吾に錢を與へよ、吾も商賣せんと乞ふ、母曰く、吾れ今迄貧にして、親族の力を假り、纔かに汝を育てたり、汝に與ふべき財物少しも無し、但し此村の某甲商主は、本と汝が父の知人也、往きて助力を乞へと、子乃ち商主の家に詣る、時に此商主より三度錢を借り、三度利を失ひし人有り、商主瞋つて其人を召し叱責最中也、所ろが、家婢糞掃と俱に死せる鼠を持出で棄んとす、長者之を見て彼人に向ひ、汝知らずや、金儲け上手な者は、此下女が棄てに往く鼠一疋を資本としても、大身代を仕上るぞと詈る、彼の若者之を聞て、尤もな事と感じ、婢の跡に隨ひ行き、坑に棄し鼠を拾ひ、大市中に到る、或る家に饑たる猫を柱に繫げり、鼠を示すに欲しがりて跳り廻る、主人出來りて一捧の豌豆を以て死鼠と交易す、若者瓦を熱し豆を熬り、衣裙に裹み、冷水を瓶に盛り、村外樵夫の停息すべき處に向ひ、彼輩の還るを持つ、日晩れに樵夫群れ歸るを見て、若者、今日は暑かつた、且らく息ひ給へとて、豆と水を與へければ、樵夫等、小弟汝は何處へ往んとするかと問ふ、若者、吾れ薪を取りに往く也と答ふるを聞き、時刻晩ければ、往くも益無しとて、各の薪一把づゝ呉れたり、若者之を集めて一擔ひとし、市に往き賣り、得る所の貝齒もて豌豆を買ひ、悉く熬り、冷水一瓶と共に持て、翌夕復た樵夫に給す、樵夫等大に悅び、汝日々此處に來れ、我輩各の一樵もて酬ゆべしと約す、斯くし續けて多く利を獲つ、是時若者諸人に告ぐ、兄等自ら柴を持て市に向ふは面倒甚し、總て吾が舍に積め、我れ爲に之を賣り、計算して價を酬るは如何と、諸人之に從ふ、或る時七日雨降り止まず、柴の價大に騰り、多く贏利す、此上柴を賣て人に賤まるゝは面白からず迚、雜貨商店を開き、獲利轉た多し、是も耻べき業也とて香具屋と成り、又大儲け、其れから兩替店を開き、益〻繁昌し、他の兩替店皆な流行ら無く成る故、同業者嫉んで、鼠一疋から成上つた店なればと蔑視し、鼠金舖主と綽號す、一同集りて彼店有ては我等廢業の外無し、何とか彼を激して、其父同前、航海貿易して、難船で死せしめばやと議定す、由て俱に彼店近く、話しの聞える處に赴き、大聲で話すらく、凡て世の中を觀るに、先祖の偉業は、必ず子孫の代に及んで、日に衰へ往く、譬へば、最初象に乘せし

ふ話、史實ならずと斷せんに、此話何方より來りし歟、印度より波斯に入しや疑を容れず、去れば、印度は「ホイッチングトン」譚の根源地にて、北は蒙古人、南は土耳其人を經て歐洲に入たるなるべく、其英國に行はるゝ者は、北方傳來たる事、殆ど疑ひを容れず、吾人は猶ほ、此話の根本說が、印度より見出さるべきを期待すと。

此「クラウストン」の期待に反し、今に至る迄、斯る印度原話が發見されざりしは、今年出版大英類典（上出）に明かなり、云く、或は謂く、此話の元は、北海の貿易に、猫と名くる船を用ひしに在りと、或は謂く、佛語「アシャー」（買ふ）と「シャー」（猫）と音近きに出づと、然れども「トマス、ケートレー」（Thomas Keightley, 'Tales and Popular Fictions,' 1834.）は少くとも十三世紀に既に、猫が本主を富せし話、波斯丁抹伊太利に存せるを證せりと、此他別に印度に似た話有る事を言はず、又件の三國の外に「ブリタニー」、那威等又此話有るを「クラウストン」が證せるを引かず「リラウストン」又「ケートレー」の發見を一言せざるは、孰れも麁略な仕方也。

熊楠此頃一切經を抄寫する內、義淨譯、根本說一切有部毘奈耶卷卅二、佛が愚路茲芻の因緣を說けるを讀むに、次の物語有り、是れ恐くは、佛在世已に印度に存せし古話にて、佛滅後數百年經ぬ內、佛說に編入し記載され、其後種々變態を生じて、波斯と歐洲諸邦の、猫に因て巨富と成し人の物語と成れる者なるべし、云く、昔し或る村に富人有り、妻を娶て

富人も、段々馬に乘る樣に成り、次に駕籠と變り、終には膝栗毛で徒步するが如し、此鼠金舗主も、先祖以來、皆な大海に入て好珍寶を齎らし、自らも富み、人をも濟ひ、遠近に稱歎されつるに、此人は漸く小き店で、貝齒の兩替なんてけちな事で暮し、日夜「チョウチョウカイノカイノ十丁十丁」抔と、貝の勘定をやらかし、辛苦生を求るが好き實例ぢやと、舗主之を聞て諸人に尋ね、先祖の委細を知り、默然家に歸り母に、我が先祖は、航海貿易して富人たりしかと問ふ、母扨は誰かに聞しと見えたり、此上隱し立ても無用と惟ひ、いかにも祖先皆な航海して大富たりしと答ふ、是より其子、海に入て珍寶を求めんと言ひ張りて止まざりければ、母遂に許可す、於是大舶を調へ、長風に乘じ、直ちに寶洲に至る、（原文此處に、商主枕師をして廣告せしむる語中、乘舶者の一族知友、僮僕等、其の爲めに、沙門婆羅門等に給施し、善根を植ゆべしてふ言有り、上に引たる、「シラフ」の貧民、朝夕商舶の爲に祈禱せる風と合せ攷ふべし）多く珍寶を收むる事、稻麻穀豆の如く便ち船中に傾置して、贍部に還る、如是前後七度皆な安穩に事遂げ、鼠金舗主大富無雙と成る、其母汝最早や妻を娶れと勸めしに、子答て、我れ債を還して後ち、母の敎に隨はんと言ふ、母汝ぢ祖先以來他人に負債せし事無しと訝るに、子吾れ自ら債有るを知れりとて、金銀玻瓈琉璃の四寶もて、鼠四疋を造り、銀盤に砂金を滿てたる上に置き自ら持て父の舊識なりし商主を訪ふ、其時恰かも彼商主諸人と會し、諸君知れりやと彼の鼠金商主大福德有り、若し死者を執るも盡く金寶と成すと、大法螺最中の處へ、門番の案內で、鼠金商主入來り、寶鼠金盤を奉て曰く、此鼠が永々恩借の資本、金盤は利足、宜しく改めて受取り下されませと、商主之を聞て大に痛み入り、曾て金子を御用立て申せし覺え無しと言ふ、そこで鼠金子、吾れ十分覺え有りとて、往日棄鼠を拾ひし因緣を詳說せしに、商主、汝は誰の子ぞと問ふ、因て亡父の名を述ければ、商主曰く、汝即ち是れ我が知識の子、我れ宜く汝を子とすべし、汝の父出立の日、多少の財物を我處に置るを、未だ還さゞりしとて、即ち長女を以て彼に許して妻たらしめ、瓔珞嚴飾し、送て其宅に至ると。

此長話しは、時代の先後より言はゞ、波斯及び歐洲諸國の「猫で成り金の物語」の祖先たる事疑ひを容れざるが如し、但し波斯と歐洲の諸譚、皆な猫を大働き手とせるに反し、鼠金舗主の富は、鼠に主因すとせり、何故此大違ひを生ぜるかを研究せんが爲に、予は此等諸譚の根本地たる亞細亞にて、古へ異宗敎の諸民が、如何に猫と鼠を、或は愛し或は憎みしかを調査すべし。

只今予は田舍に居り、身邊書籍完備せざるが故に、釋迦佛出世前の印度人が、猫と鼠を如何に扱しかを知悉せず、唯一つ知れるは、「マヌ」の法典（西曆紀元前九百年、若くは千年頃成ると J. F. Clarke, 'Ten Great Religions,' 1889, pt. I. p. 101 に見ゆ）既に狡黠なる猫が、發心せりと詐稱して、鼠を捕へ殺す話を引る事也（Gubernatis, 'Zoological Mythology,' 1872, vol II. p. 54）此の話佛經にも出づ、根本說一切有部毘奈耶破僧事卷廿等也、雜寶藏經卷三には、猫が山鷄の妻となり、之を給ひ殺さんとせり、鷄は佛の前身、猫は提婆達多の前身と有り、Tavernier, 'Les Six Voyages,' Paris, 1676, tom. I. p. 442 に、拜火敎徒は、蛇、蝮、蛙、蟾蜍、蟻、蝦、鼠、蹊等を忌む、特に猫を極て魔性有る獸として嫌ひ鼠蹊がいかに家內を荒すも、寧ろ之を寬容し、猫を宅に飼ふ事と無しと言り梵敎もと拜火敎と同根に生じ、諸事一致せる事多きを攷るに、古梵敎徒も亦、斯の如く、猫を忌むの餘り鼠屬を寬恕せしならん、大英類典十一版、二八卷、七五五頁に、今日印度の妖巫は猫を使ふと有り、曾て印度の回敎徒は猫を好遇するに反し、「ヒンヅ」敎徒（梵敎の紹續人）は甚く之を虐待するの狀を筆せるを讀し事有り、V. Jacquemont, 'Voyage dans L'Inde,' Paris, 1841. か "F. G. Younghusband, 'The Heart of a Continent,' London, 1896. と記憶す。

佛敎原來梵敎に抗して起りたれど、太だ敎義に障らぬ限りは、無數の作法傳說を梵敎の儘襲用したり、されば猫を忌み鼠を怨する事、亦梵敎に基ける歟、佛敎殊に殺生を忌み、弱者を憐れむ事、一層此風を助長せしなるべし、大乘菩薩分別業報略經に、邪貪無厭足・兩舌離親友、分別善惡所起經に、慳貪而邪誑、多行盜賊、斯る人死後猫と成ると有り、根本說一切有部毘奈耶卷四六には、世を欺きし法師死して猫に生ると言り、本邦の俗傳に、佛涅槃の時、諸畜生之を悲みしに、猫のみ笑ひしとて、涅槃相の繪に之を描かず、猫之を歎き、兆殿司に請ひし故描き入たるが東福寺とかに有りと云ふ、又猫死人に近けば死人起て踊る抔いふ（歐洲にも似た事有り、Tozer, "Researches in the Highlands of Turkey," 1869, vol. II. p. 85）慶長中に筆せる猫の草紙に、猫は印度より來れりと云る抔參考するに、斯る迷信は、印度より徙れる者歟、字多天皇御記、寬平元年二月六日、太宰少貳源精、秩滿來朝、所獻驪猫一隻云々、先帝愛翫、數日之後、賜之于朕、朕撫養五年于今、每旦給之以乳粥云々抔有るを見合すべし、支那には、禮記、郊特牲第十一、蜡の祭を說けるに、古之君子、使之必報、迎猫爲其食田鼠也、迎虎爲其食田豕也、迎而祭之也是れ古支那に猫崇拜の俗有し也、佛敎入るに及び、上述印度の風に染り、猫を魔物とせり、北史曰、獨孤陀、性好左道、其外祖母高氏、先事猫鬼、轉入陀家、每以子日夜祀之、猫鬼每殺人、取其財物、置於所事猫鬼家、鬼若降人則面正靑、若被牽曳、陀後敗免死、朝野僉載曰、隋大業之季、猫鬼事起、家養老猫爲厭魅、頗有神靈、遞相誣告、京都縣邑、被誅戮者數千餘家、蜀王秀皆坐之、隋室旣亡、其事亦寢、（淵鑑類函卷四三六に引り）Filippo de Marini, 'Historia et Relatione del Tunchino e del Giapone,' Roma, 1665, p.134に云く、東京國の俗、除夜に闘上に佛と猫を描き、鬼が家に入んとするを防ぐと、蓋し東京にも、古へ支那と等く、猫崇拜の風有し遺痕な

るべく、偶まを以て、「ネーリング」博士が、家猫二源有り、一は東南亞細亞、一は西北亞非利加より出たりと云ふ說を確かむるに足りなんか、（大英類典卷五、四八八頁參照）

回教徒が猫を好遇する事、頗る梵教、佛教、拜火教諸徒に反せるは、所見多し、例せば、A. G. Busbequius, 'Travels into Turkey,' London, 1744, p. 140 に云く、土耳其人は、狗を猥褻汚穢の畜とし、之を卑めども、猫を貞潔溫良の獸とす。熊楠案ずるに、如何に賢き犬も、猥行の節人目を憚らず、然るに、猫は交會の狀を人に見する事甚稀なり。（A. Lacassange, 'De la criminalité chez les animaux,' *Revue Scientifique* 3me Série. tom. III. p. 37.）

事の起りは、「マホメット」猫を特愛し、曾て机上書を讀しに、猫其袖上に睡れり、禮拜の時到て起んとせしが、猫を覺すを憚かり、袖を切て寺に赴けりとは。漢哀帝が、董賢を嬖幸して、爲めに斷袖せしと、東西好一對の談也、「バウムガルテン」の記行 'The Travels of Martin Baumgarten,' in Churchill, 'Voyages and Travels,' 1732, vol. I. p. 428 に云く、予輩「ダマスカス」市を步行せし時、壁を取り廻せし大厦に猫充滿せるを見、老翁に其所由を問しに、答を言しは「マホメット」此所に住みける時、常に袖中一猫を安置し、之を撫で養ひ愛せり、蓋し猫の所爲を觀て、自分の動作を制せし也、回教徒之に倣ひ、爭て猫を飼ひ崇奉し、之に食を與るを、殊の外善業とす、若し猫を飼て餓しむる時は、其人上帝に見放さるとなす、故に市場に猫に飼ん爲とて、牛の肉と肝又心臟を乞ふ者多しと、但し「シリア」昔し埃及人に服し居たれば、埃及より猫崇拜を傳來せしならんと。

支那語、古埃及語、併びに猫を「マウ」と呼ぶ、其鳴聲に據る也、*Notes and Queries* 8th ser. XI. 351 に、或る人寄書して、猫の睛、日の高さに隨て增減變化する故、古埃及で、猫を日神の愛物とせし也と說り、同卷一六と二三五頁に、支那と錫蘭で、猫眼を視て時を知る事を言り、和漢三才圖會卷卅八、鹽尻卷十二等にも出たり。

佛典には、猫と反對に、鼠を性善き獸とせる例多し、少許を擧んに、佛說興起行經卷下、又大唐西域記卷六に、婆羅門女、佛說法中に押寄せ、佛我を妊ませたりと公言し、其膨れたる腹を示せし時、帝釋化して一鼠と爲り、女の衣に入り、帶を嚙で、懷中せる盂を落し、化けの皮を顯はせりと載す、藥師十二神將は、鼠頭神を首とす、日本の俗七福神中、大黑天有り、鼠を愛すと傳ふ、是れ本と印度佛寺の厨神なる由、（南海寄歸內法傳卷一）厨神鼠を愛すとは、蓋し印度の傳說に基きしならん、佛僧が鼠を愛せし例は、續高僧傳卷廿、岑闍梨者、誦金光明經、咸四天王來聽云々、鼠百餘頭皆馴擾、爭來就人、鼠有病者、岑以手摩將之など有り、支那には、軍神兼福神たる毘沙門天、鼠を使ふとせり、宋高僧傳卷一、天寶中、西蕃、大石、康三國、帥兵圍西涼府、詔不空入、帝御子道場、空秉香爐、誦仁王密語二七徧、帝見神兵五百員、在于殿庭、驚問空、空曰、毘沙門天王子、領兵救安西云々、四月二十日果奏云、二月十一日、城東北三十許里、雲霧間見神兵長偉、皷角喧鳴、山地崩震、蕃部驚潰、彼營壘中、有鼠金色、咋弓弩絃皆絕、城北門樓有光明、天王怒視、蕃師大奔云々、因勅諸道、城樓置天王像、此其始也、四十一年六月の早稻田文學六六頁に、予が言たる通り、理齋隨筆卷六、松永久秀志貴の城に始て天守を造り、又長屋を作る、志貴に毘沙門有り、因て是を多門と名くと有り、田中博士は、天守の設備は、永正頃より有りと述らる、今案ずるに、唐玄宗の朝既に之有し也、又不空三藏より約百年前、玄奘三藏が筆せる、大唐西域記卷十二には、瞿薩旦那國王が、毘沙門天の後胤と自稱する由言ひて、金色の鼠其國難を拯ひし事を記す、不空の傳に載たるは、之より出たるやらん、云く、王城西百五六十里、大砂磧中有堆阜、並鼠壤墳地、聞之土俗曰、此砂磧中、鼠大如猟、（今昔物語集、卷五には、屈鹿那國鼠王、金色三尺許りとせり）其毛則金銀異色、（Metallicly Tridescent に恰當す）爲其羣之首長、每出穴遊止、則群鼠爲從、昔者匈奴率數十萬衆、寇掠近城、至鼠墳側屯軍、時瞿薩旦那王、率數萬兵、恐力不敵、素知磧中鼠、奇而未神也、洎寇至、無所求救、臣民震恐、莫知圖計、苟復設祭、焚香諸鼠、冀其有靈、少加軍力、其夜王夢見大鼠曰、敬欲相助、願早治兵、旦日合戰、必當克勝、王知有靈祐、遂整戎馬甲、令將士未明而行、長驅掩襲、匈奴之聞也莫不懼焉、方欲駕乘被鎧、而諸馬鞍、人服、弓弦、甲縚、凡厥帶系、鼠皆囓斷、兵寇既臨、面縛受戮、于是殺其將、虜其兵云々、王感鼠厚恩、建祠設祭、奕世遵敬、特深珍異、故上自君王、下至黎庶、咸修禮、祭以求福祐、行次其穴、下乘而趨拜、以致敬祭、以祈福、或衣服弓矢、或香華肴饌、亦既輸誠、多蒙福利、若無享祭、則逢災變、此話法螺多けれども、多少の據ろ無きに非じ、中古迄、東土耳其斯坦に、金毛の小獸、較や鼠に似たる者存せしならん、又今日存するも知れず、鳥魚昆蟲と異り、獸類の毛色は、餘りに多樣ならざれど、虹彩有る金屬色の者、歐洲の水麝鼠 Desmans 日本の「ヤマムグラ」Urotrichus. 亞非利加の「金ムグラ」Chrysochloris. と食蟲獺 Potamogale verox. （以上食蟲獸）濠洲の水鼠 Hydromys. （嚙齒獸）南米の二趾食蟻獸 Cyclothurus. 及び「ピチシャゴ」Pichiciago. （倶に貧齒獸）等有り、又東土耳其斯坦人、實際鼠を崇拜せしは、前年「スタイン」氏、其遺墟より鼠神像を掘出し、之を證せり、（M. A. Stein, 'The Sand-Buried Cities of Khotan,' 1903）序でに云ふ、歐洲諸邦に、希れに寒中、群鼠の尾相連纏粘着して容易に解けず、異觀を成すを、鼠王の冠と稱す、E. Oustalet, *La Nature*, 9 Juin, 1900, pp. 19—20 に其圖解を出せり。

松屋軍記卷八十一に此故事を並べて、吾妻鏡卷一治承四年八月二十五日の條を引けり、其大意は平家方俣野景久、駿河國目代橘遠茂と兵を合せ、甲斐源氏を襲はんと昨夜富士の北麓に宿せし處、景久並に郎徒が帶せる百餘張の弓弦鼠に喰切

られ思慮を失ふ、安田工藤等之を討ちしに、弓弦絶たれて防戰する能はず、景久打負けて逐電すとなり。

以上予は先づ古印度に行はれたる鼠金輔主の話を述べ、次に佛徒と回教徒が鼠と猫とに對する感想の異なる所以を序せり、讀者之に依て當に知るべし、佛徒間に初て行はれたる鼠が人を富せし物語が、回教徒の手を經て變態し、遂に歐洲に入て、「ホイッチングトン」等、「猫で成り金の譚」と成り畢れるを、蓋し回徒特に猫を好愛するより、之を以て佛徒談中の鼠に代へたる也、兩譚其源を異にせざるは、共通同似の箇所尠なからぬを見て明らむべし、則ち主人公の最初貧しく暮せし事、其暴富は、或る一獸と、航海貿易に因れる事、終に曾て自分に不信切なりし人の娘を娶りし事等也。

南九州道中記

坪谷水哉

未明に着た日向の細島

『ア、今度の樣に安全な航海は無い』とは、平生此邊を往來する乘客が、馬山丸を降るときに漏らした喜びの聲だ。此所は日向の細島港で、昨夜豐後の別府を發し、日向灘の難航路を無事に過ぎて、船の着たのが午前三時。天地闇黑、唯だ四五點の提灯が見ゆる方を僅に陸と知り、艀舟で其所へ上陸すると、『高鍋屋で御座い』『河内屋で御座い』と、旅館から迎への男が口々に叫ぶが、余は船中の新知已なる宮崎町の岩切與平氏に伴はれ、最も近い高鍋屋へ行く。

入口の座敷へ鞄を運ぶと、其所には大鼾聲で客が寢て居るに驚ろき、更に隣室へ入ると、余等の外にも二人の船客が來た。京都の織物行商人な相で、四人で火の無い火鉢を圍みつつ、洋燈の光明で壁間の額を見るに『翻銀』の二字を大書して、種樹と落款するは、舊高鍋藩主秋月種樹子爵の筆だ。舊時同藩主の江戸往來には、常に此所から乘船した所といふ。

最早夜明に間も無き故、直ぐに朝餐と馬車との準備を命ずると、頓て國產の炭火が多量に運ばれ、續いて出た朝餐には、鯛の味噌漬が甚だ美味で、腹の準備の出來た時、丁度馬車も來た。で、余と岩切氏が一臺、行商人達が一臺、何れも提灯照らして出發したのは午前五時だ。

意外に整頓したる乘合馬車

天孫降臨の地で、神武帝發祥の國として、日向は日本の最古國だが、今は其れが最も幼稚な國だ。是れ全たく交通不便の爲に然るといふ。元來九州第一の大國で、面積は四百八十七方里、他の薩摩大隅の二國を併せたる六百方里より少しく小さいだけだが、人口は僅に五十三萬弱で、薩隅二國の百三十萬人の半分よりも遙に少ない。といふのは四方の往來が困難で、鐵道は、僅に西の方に鹿兒島線が一小局部を掠めて過るだけ、海は所謂日向灘の難航路で、延岡、細島、内海、油津の四港へ、小さな汽船が寄るばかり故、土地は廣いが人口は少なく、未開の原野が遠く連なり、霧島山の高千穗峰が、神代の儘に西天に聳ゆるのみか、山野ともに太古の儘なる所が多い。

斯く交通不便な地方も、近來國道や縣道を修めて、盛んに乘合馬車を利用し、一日數回時を定めて發着するのは、時間も正しく、賃錢も一定し、赤い制帽を冠る馭者は、警察の取締りが嚴で、馬車も馬も可なり立派な上に、馬の虐待も無く、時間が來れば空でも發車し、途中で行人にも乘車を勸めず、感心に規律が正しいので、旅客の受る便利は甚だ大だ。細島からは延岡へも宮崎へも、其の定期馬車あるも、余等は急ぐまゝ特別に仕立て、細島から一里走つて國道へ出た頃夜は明けた。時は十一月十九日、天氣は好晴だ。

馬車は日向灘を下瞰しながら、山の裾を走るに、岩切氏は海岸を指さし、彼所は御金が濱とて、日本第一の好い白き碁石の產地だ。其れは年々暴風の後に、此の海岸へ打ち揚げる蛤は、貝殼の厚さ三分五厘位なるが多く、其れで碁石を造れば、他に類の無い肉の肥えたのが出來る故、東京の碁客で、其れを集むる爲に、年々特に此地へ來る人があるといふ。

最舊國の最幼稚國

走ること約三里、山麓に下瞰すが美々津町で、町の北端を美々津川が流れ、河幅三十間位なるが、橋無く、舟で渡す。國道に橋の無いが奇らしい。流石に橋錢は徵らぬ。細島からの馬車は、此川までが一區域で、刈向ふから更に馬車を繼ぐ。